

奈良・平安初期の日本漢文における授贈語彙

穉 田 定 樹

一

平安時代古記録の言語の形成経路は、必ずしも単一なものではなかったであろうが、それに先行する奈良時代、平安時代初期の史籍や儀制書の漢文体とは、少なからぬ交渉があったものと想われる。本稿は、この間の事情を説明することをめざして、まずは、日本書紀、続日本紀、三代実録の三史書における授贈の行為を表わす語が、どのような語彙を、如何に構成しているか、その実態を記述しようとするものである。三史に限ったのは、それだけの余裕しか持てなかったからであり、日本後紀、続日本後紀、文徳実録、また、養老律令や貞観儀式・延喜式などについては、別に報告したいと思う。なおまた、平安時代古記録には、さらに遠く先行する中国漢文との交渉もあったであろうから、その方の調査も今後の課題としなければならない。

ところで、ここに授贈の語彙と称したのは、物件や人間を、所有権・支配権などと共に甲から乙へと移転する、贈与・供与・送付など

の行為を表わす語の集まりのこととする。奈良・平安朝の漢文体、記録体の文章には、この種の語が、種々の漢字を用いて表記されている。それらの語の認定・抽出はおおむね支障なくできるが、それぞれはどんな音韻形態に語音であったか、ということを確認するのは、きわめて困難である。音読したのか訓読したのか、どの音ないしは訓によって受容されたのか、ということの判別はきわめてむずかしい。日本書紀などには平安時代の古訓がないわけではないが、それがそのまま続日本紀以下の平安初期の漢文や平安時代の古記録の訓として定着していた、という保証はない。『色葉字類抄』『類聚名義抄』に見える訓もまた、個々の文脈中の用字の語音をまで、しかもかなりの年数をさかのぼって指し示しているとは言えないであろう。その限りでは、標記のような語彙について考察することは絶望的であるかもしれない。しかし、それらの語は、今からは確認し難い、ある語音を形として用いられていただけではなく、同時に、漢字を形として実在していたことも確かである。とすれば、その漢字を形態上の示差的特徴として、

それらの語を観察対象とすることは可能である。山田俊雄氏が『日本語と辞書』（中公新書）などで提唱される「漢字語」をこのように解した上で、あえて標記の課題に立ち入ってみようと思う。以下、たとえば「奉」と記した場合、また、「奉獻」と記した場合、その用字と受贈の行為を意義として有することだけを特徴として、その語音はしばらく問わないことにする。

ところで、奈良・平安時代の漢文や古記録には、授贈を意義とする漢字語が、「施」「志」「授」「与」などをも含めると、十を超える漢字で記されている。本稿では、対象をさらに限定して、その行為が尊者、上位者に向かい及ぶ上向性の語だけを取り上げる。換言すれば、タテマツルという訓を持つ漢字で表記されている語に限定する。岩崎本日本書紀や図書寮本日本書紀の訓によれば「奉」「獻」「進」「貢」「上」「供」と、その複合語の「奉進」「奉遣」「貢獻」などである。さらに言えば、受け手尊敬の謙讓語と見ることのできる語である。他に「奠」などもあるが、例数も少ないので、本稿では除外した。なお上記の六字は、タテマツル一訓しか持たないわけではない。「奉」にはウク・ウケタマハル・ツカマツル・ツツシムなどの訓（名義抄）があるが、それらの意義によって用いている場合は、もちろん、対象外とする。なおまた、上記の三資料は、新訂増補国史大系を用いた。

二

さて、紀、統紀、三代実録における授贈の語を、行為の対者、及び、対象を主たる基準にして類別し、その頻度数を表示すると、論末の別

表のようになる。

類別のAは、神格的存在を行為の対者とするものである。ただし、神代紀の神々は、現実的世界の存在として登場していると見なして、神格者とはしない。Dは、その贈与献進の行為が、調などの租税的負担をはたそうとする行為であることが、同一文脈内に明記されているもの、たとえば「貢調庸」の「貢」などである。もっとも、百濟、新羅、渤海国などの外国使節の献進の行為については、朝貢であるか否かについて、双方の見解が相違する場合があるが、その事実関係よりも、叙述の如何によって類別した。B、Cは、Dのような、調租であることの目じるしを持たないものを類別したのであるが、Bは、まず調租とは考えられないもの——その点ではAも同じであるが——を類別した。B1・B2はもちろんそうであるが、B3の「公器・公印」の項も、節刀や木契などの返却の行為であり、B4も、官署・官人が、むしろ恒例の公務として卯杖や曆や、永の様を献上する行為である。治部省式に掲げている祥瑞の献上（B5）もまた同様。

C1は、主として物産類の献進であるが、統紀や三代実録の事例をもとにして、次のような区別をほどこしてみた。C1の④は、次例のように、個人が、田地・稻・米・布・軍粮・錢・馬などを、国用に宛てるために献進して叙位されている場合である。

○散位正八位上民忌寸磯麻呂、献錢百万・稻一万束。授從五位下。（統紀、天平神護元・一〇・一九）

これらの授贈対象である物は、調の品目である物が多いが、叙位の特典を蒙っているということは、単なる調の納付ではなく、むしろ寄付

的行為ではないだろうか。この点については、史学の方の教示を蒙らねばならないのであるが、しばらく右のように解してC1④とする。

C1の④は、④のように受賞してはいないが、④に準ずると見られるもの。ただし、この④は、特に統紀に集中して見られ、その時代の特徴として、そのような事実があった、という事かもしれない。C2は官署や官人が物を献進する行為であるが、統紀や三代実録の薪や走馬・装馬の献進は、多分に年中行事的であり、その点ではB3に近似するとも言える。すなわち、調租的性格は顯著とは言えない。C3は、外国からの献進で、「献物」「信物」「方物」などと記されているもの。特に書紀では、次例のように、調と区別している例が少くない。

○檢_ミ百済国調_ミ献物_ニ。(皇極紀、二・七・一)

○新羅進_レ調。從_ニ筑紫_一貢上。細馬一疋…金銀、霞錦綾羅、虎豹皮、及藥物之類、并百余種。亦智祥・健敷等別献物、金銀、霞錦綾羅、…鞍皮絹布、藥物之類。別献_ニ皇后・皇太子及諸親王等_一之物、各有_レ数。(天武紀、朱鳥元・四・一九)

これらは書紀ではCの諸項に分属させて表示したが、物件は同じでも、贈与の性質には違いがあったと見られる。C4は、国郡が献身の主体であり、それだけに調租性が強いと見えるが、断定はできないもの。これらに対して、Dは、上述したように、調租的性格のものであることを明記しているものである。

Eの酒食は、食料を献上するのでなく、そのままとりすすめるように調えられた食品が対象であるもの。書紀の「進食」は、ミヲシと訓まれているが、本来は調えられた食事をさしあげる行為の表現であらう。

う。意識のミヲシが成立している点に、この類の特徴を認めることができる。Fは、名称、文書の類を与えたり贈ったり、送付したりする行為、要するに、言語であるものを行為の対象とする類である。「献芹之誠」(統紀)「献賀燕之志」(献管窺)(三代実録)など、心的なものもF類とする。Gは、人格的存在を対象とする類である。

なお、頻度数を表示するにあたってほどこした一、二の処置がある。①体言また体言の構成要素であることの明らかなものは除外した。「朝貢」の「貢」、「供膳」の「供」、「貢輸」の貢などである。②同じ一つの行為が複数の対象を持つ場合、対象ごとに一例と数えた。

三

さて、別表によって見ると、「奉」は、特に統紀、三代実録において、A群での使用率が抜群に高い。すなわち、神仏を行為の対者とする場合の行為に、「奉」の専用度が著しく高いのである。統紀や三代実録ほどには「奉」に集中しない書紀においても、たとえばC・D群での「貢」「進」や「献」に対する「奉」への使用分布のきわだった薄さと併せ考える時、A類における「奉」の集中度は、かなり高いと言えよう。A類における行為の対象は、幣、神宝、神馬が主であるが、その他、神財、神領、御燈、新銭などがある。幣については、「奉」と「幣」とが連続する語順になって、「奉幣(す)」とも読める例も少くなかったが、「奉伊勢大神宮幣并神宝」(三代実録)のように明らかに動詞「奉」の認められる場合もあり、前者の場合も動詞「奉」と認定した。かように、「奉」が対神格者の行為に集中する理由につ

いては、中国漢文を視野にいれていない今は判断しかねるが、漢字として、ていねいに物をささげる意では献とも多分に共通点を持ちながらも、「奉示」「奉待」「奉事」「奉許」（日本書紀）のように、おそらく本来は、「つつしみ敬まって——する」意を加えて接頭語的に用いたものを、国訓としては、「——シタテマツル」と、補助動詞化した、いわば「奉」の独自性——強い敬語性と関係することではなからうか。なお、仏を対者とするA群の「奉」がきわめて少ないのは、奉幣のような神祭事が政事として重要視されていたのに対して、佛事がそこまではまだ至っていなかったからであろう。また、供花など、むしろ「供」が仏事になじんだ語であったということも考えられるが、その「供」自体の数量も非常に少ないので、前者が主因であろうと思われる。平安中期の古記録の調査を終えた上で再考してみたい。

B群では、「奉」に関しては資料によって差があって、なんらかの解釈を下せる状況ではないが、ただ、祥瑞や祝祭儀品をたてまつる行為の表現にあって、「献」の専年度の高さが注目される。そして、その状況は、C群にも顕著にうかがえると同時に、D群における、他の語に対する「献」の使用率は著しく低下し、「進」「貢」の使用率が急上昇する結果になっている。特に三代実録においては、より調租的性格が強いものを含むC4の国郡辺境からの献進物において、「献」は調租とは無縁な鏡や銅鐸の出土品を対象とする二例しかなく、事実上は、D群と並んで使用率ゼロの状況である。義務づけられない献進の行為、それが「献」の特性ではなかったか。とすれば、その点でも、「献」と「奉」とは近似点を持っていたことになる。ただ、「奉」の、

補助動詞的ないしは接頭語的用法や、「奉詔」「奉勅」のような、うけたまわる意の用法、また「侍奉」「奉事」「奉仕」のような、つかまつる意の用法は、「献」にはなく、「献」はたてまつる意に主用される、という、用途に広狭の差はあった。

ところで、「進」と「貢」とは、三資料を通じて、程度の差はあるけれども、「奉」や「献」との相対性において、かなり近似する現象を呈している。ただ、三代実録に至ると、五月節の走馬・装馬を親王已下五位以上の者が献上する行為や、諸国の牧からの馬の貢進、年貢の鷹や鵠の献上などには、「貢」が定著している。ただ、その現象と、G群の采女や兵衛等を諸国からたてまつる行為の表記にも「貢」が定著していることと、どう関わるかについては、今はまだ考え得ない。これも、今回は整理し残した他資料を整えた上で再考してみつつもりである。ちなみに、このG群には、妻妾として女性を尊者のもとに行かせる行為、使者を送り遣る行為、土地や部民を朝廷に献上する行為、その他、朝廷に勤仕させたり労務に就かせたりするために人をたてまつる行為、あるいは俘や囚人を朝廷に奉る行為、また、新羅や百済から、僧侶や学識者、技術者などを日本の朝廷に行かせる行為など、種々な行為がある。

ところで、この「貢」に対して、「進」は「進」で独自の使用領域を持つとした。名称や文書類を送る行為の表現である。日本書紀ではまだ顕著にはなっておらず、むしろ「上」の方が優勢であるが、三代実録では「進」がきわだって多く用いられるようになっていた。続日本紀も、「進」が「上」よりも多くなっているが、大差はなく、過

渡的な状況を呈している。ただ、F3の表の類に関して、全く「進」が用いられていないのは、「上」にあつては「上表」、「奉」にあつては「奉表」が、漢語として、語的に固定していたからである。「進」の入りこむ余地はなかったと言えよう。実は、「上」が「上表」として用いられる例数の多くは、「上表以聞」というきまり文句としてであり、「奉」にも同じ傾向が強い。そのかわり、「進」は、一般文書の上送の表現を独占したのである。文書類の上送行為には、文書の移動の表象が強い。「進」は最も適切な用字であつたと言えよう。

「上」に於いては、右に言及したように、三資料を通じて、表に関する用語に用いられるのが主であつたが、他の語の後項として複合した場合、すなわち、「奉上」「献上」「貢上」「貢上」などにおいては、前項の語の特性に応じて、諸領域で用いられている。また、「返上」などとしても用いる。もっとも、こうした複合は、「奉」「献」「進」「貢」「供」の相互間でもなされ、「奉進」「奉献」「貢進」「貢奉」「貢献」「供進」など、はなはだ多彩である。ただ、そのような複合によって、どのような意義が加えられたかは、必ずしも分明であるとは言えない。

「供」は、たてまつる意のものは、三資料に限れば、それほど多くはない。しかし、貞観儀式や延喜式などには、「供燭」「供神麻」「供神饌」「供曉膳」「供進」「供御寝具」など、かなり多く用いられていて、「供」の全貌を見るには、もっと多くの資料を探る必要がある。

一方、「供」は、三代実録だけから拾い出しても、「供事」「供祭」「供御葬」「供馬上雜芸」など、つかえまつる（つこうまつる）の意で用い

られたものが多量にあり、たてまつる意の「供」は、儀式の世界の用語という特殊性を保つこと以上には出なかったのかもしれない。

四

以上、はなはだおおまかにではあつたが、日本書紀、続日本紀、三代実録における、「奉」「献」「進」「貢」「上」「供」の六語の実態を記述してみた。そして、上述のように、ある程度、各語の特性をうかがうことができた。しかし、それは、あくまでも程度であり傾向であつて、ほとんど使いわけの意識のうかがえない事例もある。

○（鮮魚之苞苴ヲ）献_ニ于_ニ菟道宮_一也。太子令_ニ海人_一曰、我非_ニ天皇_一乃返_レ之令_ニ進_ニ難波_一。大鷦鷯尊亦返_レ以_レ令_ニ献_ニ菟道_一。（仁徳即位前紀）

○耽羅始遣_ニ阿波伎等_一貢献。〈招_ニ慰島人王子阿波岐等九人_一同載_ニ客船_一、擬_ニ献_ニ帝朝_一。五月廿三日奉_ニ進朝倉之朝_一。〉（斉明紀、七年五月丁巳）

○（叙位）以_ニ進_ニ軍粮於陸奥国_一也。（統紀、延暦六・一二・一）
（叙位）以_ニ献_ニ軍粮_一也。（統紀・延暦三・三・四）

○勅遣_ニ公卿已下侍從已上_一於_ニ諸山陵墓_一、奉_ニ荷前幣_一。（三代実録、貞観七・一二・二四）勅_ニ公卿_一献_ニ荷前幣_一、如_ニ常_一。（同、貞観六一・二・一八）

しかし、

○（秦忌寸庭庭）献_ニ杜谷樹八尋梓根_一。遣_ニ使者_一奉_ニ于伊勢大神宮_一。（統紀、大宝二・四・一〇）

この例などでは、対朝廷の行為は「献」、対神の行為は「奉」という使い分けがなされていると見られる。要するに、混交する部分と使い分けてゆく部分とがあったということになる。ただ、訓読すれば、タマツルの訓のほかは、「進」にススムが想定されるくらいであろう。したがって、ススムかタマツルかをあげば、語形の問題は、音読か訓読かにしぼられる。もし訓読し通すとすれば、右に見たような、各語それぞれの特徴は、語音の異なりを支えにすることができなくなる。この点が、後に、おそらくは平安時代中期以降、音読をするようになった一因と考えられる。

日 本 書 紀	奉	献	進	貢	上	供
A 神宝・幣帛 ・神馬ナド	14	4		貢奉 1	上献 1	3
B 1 神器・宝器 2 仏像・仏具 3 公器・公印 4 祭・祝儀品 5 祥 瑞	4奉上 1・奉献 1	9 1(杖) 12	2 1 1	貢上 1 2 貢上 1 11	3 上送 1	
C 1 貴重高級品 (金・宝石等) 2 珍鳥獸花木 3 器仗・馬具 ・皮革 4 器具・道具 5 鉦 産 物 6 菓 物 7 牛 ・ 馬 8 そ の 他 9 苞苴・土毛 10 方物・信物 11 食 料	奉献 1 1 1 奉進 1 1 奉進 1	8 19 13 2 2 4 3 10	 3 2 1 2 1 5	3 貢献 3 貢上 2 5 1 1 貢上 1 1 3 貢上 6 貢献 1	 1	2
D 1 調 賦	2 奉献 1	9	46	15 貢献 6 貢上 3		
E 1 酒 食	1 奉進 1 奉奠 1	11	1 (進食 5)		進上 1	
F 1 称 号 2 誅 3 表 4 文書・消息 5 書 籍 6 詩 歌 7 所見・心情	1 2 奉献 1 2(哀)		 1 3	 1 1	18 5 1	
G 1 妾 妻 2 使 者 3 土地・部民 4 そ の 他 5 奴・俘・囚 6 渡来人(学 者・僧・工 人ナド)	5 奉進 1 奉献 1 奉遣 6 1 奉献 1 奉進 1 奉上 1 丁 1 奉献 2 奉上 1	14 采女 1 隼人 1 夷 1 7 8	5 1 夷 進上 1	2 7 采女 5 伎人 1 貢献 1 12 貢進 1 貢上 3	上送 3	

続日本紀	奉	献	進	貢	上	供
A 1 神宝・幣帛 ・神馬ナド 2 积 奠 3 山 陵	104 2	 2				3
B 1 神器・宝器 2 仏像・仏具 3 公器・公印 4 祭・祝儀品 5 祥 瑞		 4 85	 10(節刀ナド) 1 8	 6 貢献 1		1
C 1 個人献進物 (④受賞) (田地・米・稻・布・ 銭・金・軍粮・鉾産・ 牛馬…) (⑩無賞) 2 官署官人献進物 3 外国献進物 (信物・方物 ナド) 4 国郡・辺境献進物 (鉾産・ 薬物・器仗・食料・ 衣料・牛馬…)		39 〔奉 1〕 5 3 3 20	7 2 2(馬・薪) 4 進上 1 6	2 貢献 10 2 1 (薪) 10 9 貢進 1	 3	
D 1 国郡・辺境 の調賦 2 外国の調賦		 奉進 1	5 備進 1 進納 1 3	12 貢進 1 貢奉 1 15 貢進 2		
F 1 称 号 2 誅 3 表 4 文書・消息 5 書 籍 6 詩 歌 7 所見・心情 8 そ の 他	3 5 5 奉進 1 1		 13 進上 1 1(献芹之誠)	 1 貢進 1	8 29 9 3 1 上寿 1	
G 1 妻 妾 2 使 著 3 土地・部民 4 そ の 他 5 俘 ・ 囚 6 渡 来 者		 2 1	 1 騎手相撲 使丁 2 役夫 2 2 6	采女貢進 1 騎手力者 1 貢進 1	返上 1	

三代実録	奉	献	進	貢	上	供
A 1 神宝・幣帛 ・神馬ナド 2 积 奠 3 山 陵	141 奉進 2 4 奉献 4	1	4 (牲)	別貢 1		3 5
B 1 神器・宝器 2 仏像・仏具 3 公器・公印 4 祭・祝儀品 (卯杖・曆 ・氷様…) 5 祥 瑞	4 奉進 1 6 奉進 6	32 (卯杖) 23	2 (曆) 奏進 2	3		
C 0 祝・祭儀用 献進物 1 個人献進物 2 官署官人献 進物 3 外国献進物	5 (米・錢・ 布) 奉献 3 (方物・玳 瑁ナド)	41 4 (米・稻・ 土地・馬) 9 (献物、輸 物) 1 (方物)	1 (錢) 9 (器仗・薪 錢)	9 (走・装馬)	3 (御 封) 返上 5	
4 国郡・辺境献進物 (食料・衣料・油・鉱産・資材・ 馬ナド)		2 (出土ノ鏡 ・銅鐸)	進上 2 23 進納 1 返進 1 貢進 1 採進 4	14 (馬) 4 (鵜・鷹) 貢進 2		
D 1 国郡・辺境ノ調賦			5 進納 2 奉進 1	6		
E 1 酒 食			8			
F 1 称 号 3 表 4 文書・消息 5 書 籍 6 詩 歌 7 所見・心情	2 奉進 1 30 奉進 4 1 奉進 2		38 進上 2 進献 1		1 26 5 1 1 2	
G 1 妻 妾 2 使 者 3 土地・部民 4 そ の 他 5 俘 ・ 囚	1 1 1		2 (兵士)	采女 4 兵衛 4 騎女・衛士・ 力婦・舍人 各 1 丁、匠丁 2 隼人 1 囚 1		